未来社会の創り手となる資質・能力を育成する技術・家庭科教育
―家庭・家族生活における評価の在り方―

家庭分野内容「Ａ家族・家庭生活」班
岩手町立沼宮内中学校　　岩舘　良子

１　はじめに

新型コロナ感染症に関わる「新しい生活様式」から３年。これまで「Ａ家族・家庭生活」班は人との接触に制限がある中で題材の核になる体験学習に課題を抱えながら研究を進めてきた。しかし，今年度感染症の状況が一つの節目を迎え，体験的な活動が少しずつ戻ってきた現状がある。従来の学び方に加え，ＩＣＴの活用や題材の指導計画の工夫を生かしながら，本県研究主題である「未来社会の創り手となる資質・能力を育成する技術・家庭科教育」の実現に向け研究実践を重ねたい。

２　研究のねらい

・「家族・家庭生活」における評価はどうあればよいか，計画を立てて実践していく。
・評価規準，評価場面について交流し，実践に役立てていく。

３　研究の内容

（１）　実態調査

①　生徒の実態調査

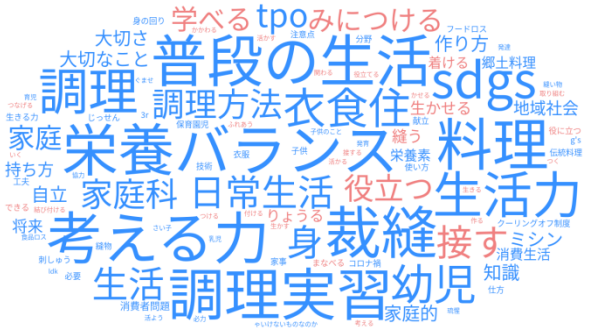


図１

昨年度実施した県全体のアンケート調査のテキストマイニングを図１に示す。家庭分野でイメージとして浮かぶキーワードに家庭生活や家族に関わることが少ないことが分かる。コロナ禍で家族・家庭生活の学習内容について苦慮しているさなかであり，目に見えない実習のイメージが強く，「家族・家庭生活」で身に付けたことについて確認する場面において，生徒が学んだことについて自分たちの内面を確認する手立てが不足していたのではないかと考える。

②　教員の意識調査

令和４年度県内技術家庭科教員のニーズの意識調査において課題にあげられた項目は「学習評価」である。次年度の一関大会や，県の研究部からの提案を受けて，本年度は主体的に学習に取り組む態度について研究をすすめる。

（２）　育成すべき資質・能力

幼児の生活と家族＜令和４年度実践＞

知識及び技能

① 幼児の発達と生活の特徴の理解
② 子どもが育つ環境としての家族の役割についての理解
③ 幼児にとっての遊びの意義や幼児との関わり方についての理解

思考力，判断力，表現力等

① 幼児との関わり方について問題を見出して課題を設定する力
② 解決策を構想し，具体化する力
③ 実践を評価・改善し，表現するなど，課題を解決する力

学びに向かう力，人間性等

① 家族や地域の人々と協働し，よりよい生活の実現に向けて幼児の生活と家族について課題解決に主体的に取り組もうとする態度
② 課題解決の過程を振り返って改善しようとする態度
③ よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて，生活を工夫し創造し，実践しよ

うとする態度

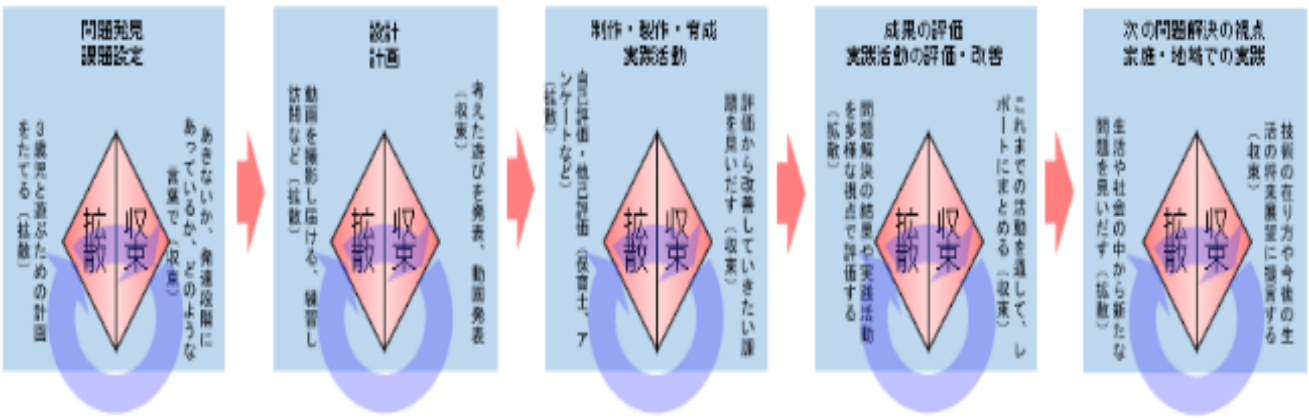
（３） 問題を見いだし，解決する題材開発
＜令和４年度の実践＞

① 思考の拡散と収束を繰り返す学習過程の工夫
学習過程を明確にし，それぞれの段階において，思考の収束と拡散を繰り返す問題解決のサイクルを意識して取り組んだ。

② 「問題を見いだし，解決する力を高める」ための題材計画の工夫
令和 2 年度に行われた岩手県内の教育課程研修会で課題としてあがったことは，コロナ禍における「幼児の生活と家族」の実習内容やその実施方法についてであった。人との接触が制限されるコロナ禍においても幼児と関わる場面を保障したいと考えた。そこで，できるだけ直接的な体験の実現を目指し，感染状況が落ち着いた場合には実際の保育施設を訪問してのふれあい体験を実施，感染者数が多数となり予防が難しい場合はリモートまたは動画を届ける形による交流で代替できるよう題材計画を考えた。

③ 題材における「見方・考え方」の働かせ方の工夫
課題発見の場面で「見方・考え方」を働かせながら事象を見つめさせることで，事象の背景に気付かせることができる。と考え，幼児について理解する必要性に触れた後，幼児を育てているのは誰か，幼児を取り巻く環境について考えさせた。幼児は家族だけではなく社会全体で支えられて成長していくこと，幼児を育てる家族にも互いに役割があり，協力が必要なこと，育てる人も子育てのサポートを受けることができることを捉えさせた。
「協力・協働」についての「見方・考え方」を働かせながら，様々な側面から「幼児との関わり」について見つめさせることで，中学生として，あるいは将来の社会の一員として，何らかの形で子育てに関与しようとする意識を高め，課題解決への意欲を高められるようにした。

④ 思考の拡散と収束の学習過程の検討
それぞれの学習過程の中に生徒の思考を拡散させる場面と収束させる場面を意図的に位置づけることにより，生徒が多面的，多角的に課題に対して考えられるようにするとともに，そこからさらに，最適な考えや方法を選択できるようにし，解決の質を高めることができるようにした。
思考の拡散を図るために，問題解決の過程で意図的に，活動を振り返り交流する場面を設けた。個人からグループや学級まで一度思考を広げ，多様な考えがあることを認識させることで，生徒は問題解決の過程で生まれてくる新たな課題に気付くことができる。そして，条件や目的，必要性に応じて，課題解決の最善の方法を判断・決定することで収束を図った。幼児との関り方についても，この学習過程を通すことにより自分なりの気付きの質を高めることができた。



４　実践概要

令和５年度の実践について

①盛岡市立北陵中学校の提案　別紙

②釜石市立釜石中学校の提案　別紙

５　研究の成果と課題

（１）成果

・県の研究の提案にのっとって研究を行っている途中である。

（２）課題

・たくさんの実践を重ね，よりよい評価の在り方を検討していきたい。

・主体的に学習に取り組む態度の評価について，数値だけではない多角的な評価の方法を探っていきたい。

（参考文献）

１）文部科学省：中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　技術・家庭編，開隆堂

２）国立教育研究所：「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料中学校技術・家庭

３）中学校　技術・家庭科家庭分野　資質・能力を育む学習指導と評価の工夫，東洋出版社，筒井恭子

４）新学習指導要領の展開 技術・家庭 家庭分野編